

<研究プロジェクト紹介>

ヤコビを継ぐもの～ Brill's New Jacoby プロジェクトの紹介 (前編)

佐藤 昇 (東京大学)

フェリクス・ヤコビ F. Jacoby (1876–1959)。アーノルド・モミリアーノとともに、西洋古代の歴史叙述研究に比類なき功績を遺した古典学研究者。ギリシア・ローマ史研究の世界に少しでも足を踏み入れた者なら、その名を聞いて誰もが迷うことなく同様の言葉を口にするのではなかろうか。本稿では、巨人ヤコビの足跡を少しばかり追いかけた上で、現在展開されているギリシア歴史家断片集に関わる新しい試みについて紹介していくこととしたい。

後世に多大な影響を残したこのユダヤ人研究者は、エルベ川沿いの都市マグデブルクに生まれた。両親は息子の将来を案じてか、プロテスタントの洗礼を受けさせる。古典学の素養はもちろん初等教育で培ったに相違ない。やがてフライブルク、ミュンヘン、そしてベルリンへと学問の場を移したヤコビは、そこでドイツの古典学界を代表する U. von Wilamowitz-Mellendorff そして H. Diels と出会うことになる。『ギリシア碑文集成』の編者と『ソクラテス以前哲学者断片集』の編者から薫陶を受けたが故か、彼は歴史叙述、そして「古典作品」以外の史料に早くから強い関心を示しており、博士論文では、前2世紀のアテナイで活躍したアポドロスの韻文作品『年代記』を扱った。口頭試問では惨憺たる評価が下された。研究教育職に従事する可能性が、ほぼ完全に否定されるほどだった。指導教授にして面接官だったディルズの、あまりに高い要求が少なからず災いしたものとされている。しかしながら、その後もなんとか着実な研究を重ねていたヤコビに、斯界の権威でもある指導者ヴィラモヴィツが高い評価を与える。1903年、彼の推薦によりブレスラウ(ヴロツワフ)大学に受け入れられたヤコビは、パロス島年代記碑文についての研究をまとめあげ、ついに教授資格を取得する。

その後、G. Wissowa が着手し始めた *Realencyclopädie der Classischen Altertumswissenschaft* (Pauly が手がけたものの増補改訂版) の執筆陣に加わっ

たヤコビは、数多くの記事を寄稿し、研究者としての評価を高めていった。中でもヘロドトスに関する長大な記事(補遺第2巻収録)は実に160ページにも及び、今なおこの歴史家を研究するにあたって無視することができない。

そうしたヤコビの名を不朽のものとしたのは、言うまでもなく、記念碑的大作 *Die Fragmente der Griechischen Historiker* (以下、FGrH と略記) である。ミュラー K. Müller の *Fragmenta Graecorum Historicorum* (1841–70, Paris) に替わるものとして刊行された同書は、文献、碑文に散在する膨大な歴史家断片を網羅的に蒐集し、その一つ一つに独力で校訂と註釈を加えた、字義通り労作中の労作と言えるだろう。ヤコビ独特の発展段階論的観点から、FGrH は、第1集「系譜と神話」、第2集「Zeitgeschichte (軍事政治史)」、第3集「地域史、民族誌」に分類整理され、最終的に、巻数で17巻、収録歴史家数では856名に及んだ。これほどの巨大プロジェクトがただ一人の研究者によって綴られたのである。

最終的に、と記しはしたが、周知のごとく、FGrH は未完に終わった。856名分の断片本文こそ刊行までこぎつけたものの、註釈を加えることができたのは607名に留まった。ヤコビは残りの註釈、そして第4集以降の構想とともに他界し、巨大プロジェクトは道半ばにして途絶することになった。

完成に至らなかった理由を、途方もない企画と史料の膨大さにばかり帰すわけには行くまい。ヤコビが最初に断片集の編纂を公言したのが1908年。研究生活の大半を過ごすことになるキール大学に赴任した翌年のことだ。それから第1巻の出版まで15年を要することになる。産みの苦しみもあっただろう。また RE の記事執筆にも時間にとられたであろう。キール大学着任後、ラテン文学に関する研究発表を求められた(あるいは自ら意識した)ことも影響を与えたかもしれない(彼はラテン文学のポストに就いたのだった)。そし

て言うまでもなく、この間の世界情勢もまた確実に影響を与えていた。1914年に勃発した第一次世界大戦のため、ヤコビは1915年秋から1918年11月まで、一時の休暇を挟むものの、3年ほどの間、軍務に服することになったのだ。待望のFGrH第1巻は、ようやく1923年に出版される。以後、第2集は1926年から30年までの間に比較的順調に上梓されたが、やがてヤコビに再び困難が襲う。ナチスの台頭である。当初、ヤコビはユダヤ人でありながらもヒトラを支持し、この人物こそローマ皇帝アウグストゥスに比肩する唯一の人物とまで評したとされている。しかし公職から非アーリア人を閉め出す法案が通過するに及ぶと、ヤコビはこれに異を唱え、1935年春、キール大学の職を辞し、ベルリン近郊のフィンケンクルクに移住した。やがて公共図書館の利用も妨げられ、出版の道も閉ざされる。1938年11月9-10日、いわゆる「水晶の夜」が発生する。ヤコビの家も荒らされた。窓は割られ、本が投げ捨てられたという。ユダヤの血故にベルリン・アカデミーの資格も剥奪された。もはや途は亡命しかなかった。1939年4月、多くの友人たちに助けられ、ヤコビはオックスフォードに安息の地を得る。戦時下のこと、環境は必ずしも恵まれなかったが、研究に生活を捧げた成果は以後、着実に公表されていった。

1956年、ヤコビは母国ドイツに帰還する。翌

月、長年の研究生活を支えた最愛の妻を失うものの、1958年、伴侶の死を乗り越え、FGrHの最終巻となる巻を出版した。翌年11月、激動の世界情勢の中、巨大プロジェクトを鉄の意志で継続した古典学界の巨人は、未完のプロジェクトを残したまま、静かに息を引き取った。

ヤコビ没後も、もちろん歴史家断片が忘れ去られたわけではない。周知のごとく、フィロコロスやテオポンポスなど、個々の歴史家については、精緻な分析が進められ、関連の専門研究が陸続と出版されるようにはなった。しかし、ヤコビが構想した壮大な企画そのものが継続されることはなかった。

変化の兆しが見えたのは、ようやく20世紀も終わろうとする1998年のことである。G. Schepens (Leuven) が中心となり、ヤコビが構想していた第4集以降を、*Jacoby: Die Fragmente der Griechischen Historiker, Continued* (Brill: Leiden) の名で再開したのである(以下 *Continued* と略記)。第4集はA: 人物伝 Biography と B: 文学史、文化史 Antiquarian literature、C: 国制、法、建国譚 *Politeiai, Nomoi, Nomima, On Cities, On Islands, Ktiseis, Aitia*、D: 宗教史 *History of Religion and Cult*、E: 奇譚 *Paradoxography*、F: アンソロジー *Collections, Anthologies and Hypomnemata (and related genres)* に分けられ、これまでにAの3分

Search Brill Online
All titles This title Go Advanced Search

« PREVIOUS NEXT »

Brill's New Jacoby

Antigonos (775)

F 1 FGrH

Stephanos Byzantios, s.v. Ἀβαντις (=Billerbeck, p.12 A3) Translation

Subject: genre: geography; genre: ethnography; genre: etymology; language; genre: etiology
Source Date: 6th century AD
Historian's Date: late 5th century BC?

Ἀβαντις ἡ Εὐβοία, ... τὸ ἐθνικὸν ὀμωνυμεῖ τῷ ἥρωι ... μαρτυρεῖ δὲ τῷ προτέρῳ λόγῳ— ἀπὸ τοῦ Ἀβάντιος Ἀβαντιάς— τὸ Ἀβαντία θηλυκόν, ὅπερ κατὰ βαρβαρικὴν τροπὴν τοῦ β εἰς μ Ἀμαντία ἐλέχθη παρὰ τῷ Ἀντιγόῳ ἐν Μακεδονικῇ περιηγήσει.

Abantis: A name for Euboia ... The ethnic name is the same as the hero. ... The feminine form *Abantia* proves the first inference that *Abantias* was derived from *Abantis*, although *Abantia* was called *Amantia* in a barbaric dialect through changing β into μ by Antigonos in his *Makedonike perihegesis* (*Geographical Description of Macedonia*).

Commentary

The original version of *Ethnika*, the geographical lexicon written by Stephanos of Byzantion in the sixth century AD, is now lost. Its contents have been transmitted through an epitome and quotations. The most recent critical edition is M. Billerbeck (ed.), *Stephani Byzantii Ethnika. Einleitung, kritischer Text, Übersetzung und Anmerkungen 1: A–Γ* (Berlin 2006).

BNJはオンラインでも公開される。画面はその一部。詳しくは後編で紹介。

冊が公刊されている (IV A1. The Pre-Hellenistic Period (1998) ; IV A3. Hermippos of Smyrnaios (1999) ; IV A7. Imperial and Undated (1999))。さらに、ヤコビが生前公刊していた第1～3集に対する索引集が1999年に出版され、2004年にはCD-Rom版も公開された。華々しいスタートを見せた *Continued* は、このまま第4集、そして第5集 (地誌 Geography) と着実に成果を上げていくかに思われたが、その後しばらく続巻刊行予定の発表もないまま (少なくとも表向きは) 休眠状態となった。

これに対して、今や結実の時を迎えようとしているのが、I. Worthington (Missouri-Columbia) を編集座長 *editor in chef* とする *Brill's New Jacoby* (以下 *BNJ* と略記) プロジェクトである。これは言わば *FGrH* の全面改定版である。第1集から第3集に収録された全ての歴史家について、基本的なスタイルは踏襲しながらも (歴史家番号、テストイモニア及び断片の番号は、問題のない限り *FGrH* と同じものを採用している)、内容は一新し、全テストイモニア、全断片について、テキストを見直し、英訳を付し、新たな註釈を加えて、さら

に各歴史家についてのバイオグラフィカル・エッセイを加えた。むろん最新の研究成果が反映された記述になっている (とはいえ研究状況に応じて、論文並みの記述になる場合もあれば、簡便な記述で済まされる場合もあり、さまざまであるが)。

ワーシントン編集座長の脇を固めるのは、英米の研究者を中心に若手からベテランまでバランスよく構成された12名の編者陣である (H. Beck (McGill) , C. Cooper (Winnipeg) , K. Dowden (Birmingham) , J. Engels (Köln) , R. Fowler (Bristol) , S. Hodkinson (Nottingham) , A. Kuhrt (London, UCL) , P. Liddel (Manchester) , J. Roisman (Colby College) , N.V. Sekunda (Gdansk) , J. Sickinger (Florida State) , D. Whitehead (Queen's, Belfast))。加えて、編集顧問に A.B. Bosworth (Western Australia) , E.M. Carawan (Missouri State) , P.J. Rhodes (Durham) の名前が挙げられている。記事の執筆には、編者も含めた、世界中の数多くの古典学研究者が参加している。日本からは、橋場弦教授 (東京大学)、上野愼也氏 (東京大学他非常勤講師)、そして私が加わることとなった。(続く)

<訂正>

先の109号において、p6とp7の図版が入れ違いになっておりました。訂正と共に謹んでお詫びいたします。

誤

P6



大祭壇展示のようす (ベルガモン博物館)

P7



東壁フリーズ、女神アテナと巨人アルキュネウスの戦い

正

P6



大祭壇展示のようす (ベルガモン博物館)

P7



東壁フリーズ、女神アテナと巨人アルキュネウスの戦い